

学術情報流通のグローバル化と 政策課題

—IFLA(国際図書館連盟)関連会議
参加を通じて—

京都大学図書館機構 平成20年度第3回講演会
(2009年2月23日 京都大学文学研究科
第三講義室)

京都大学附属図書館研究開発室
准教授 古賀 崇

Email: tkoga@kulib.kyoto-u.ac.jp

1

本日の内容

- 自己紹介と本日の発表への想い
- IFLAの概要紹介
- IFLA2008年大会にみる学術情報流通の現状
 - 「科学技術情報」をめぐる各国の取り組みと、OCLCの経営戦略を中心に
- 学術情報流通をめぐる課題
 - 日本にとっての国際交流面での課題も視野に

2

自己紹介と本日の発表への想い

3

経歴

- 学部時代は法学・政治学(特に行政学)を学ぶ
- 大学院で図書館情報学を学ぶ(1997.4～2004.3)
- 2000.8～2002.5 米国シラキュース大学に留学、Master of Library Science取得
- 2004.3～2008.12 国立情報学研究所 助手・助教
- 2009.1～ 京都大学附属図書館研究開発室 准教授(同館で初の専任教員)

4

研究課題と関心

- 政府刊行物、政府情報、電子政府へのアクセス(情報公開を幅広い視点から考える)
- 図書館、アーカイブズ(文書館)、文書(記録)管理の接点・連携
 - デジタル化の中での共通点・相違点
- 図書館・アーカイブズの領域での国際交流
- 情報政策
 - **さまざまな担い手(ステークホルダー)とその関心・利害を確認し、どう調和させるか**

5

学術情報と政策

- ステークホルダー: 研究者、大学・研究機関、学協会、図書館、学術出版社、データベース・ベンダー、国、国際機関、学生、企業、一般市民、類縁機関(文書館・博物館・メディアセンター)、etc.
- それぞれの関心・利害・思惑は何か
- どこに対立があり、どこが調整役となるか
- 参考(ステークホルダー分析の例として)
 - 名和小太郎『学術情報と知的所有権』東京大学出版会, 2002.
 - 塩崎亮「各ステークホルダーがもつ公共図書館像」『Library and information science』(48), 2002.

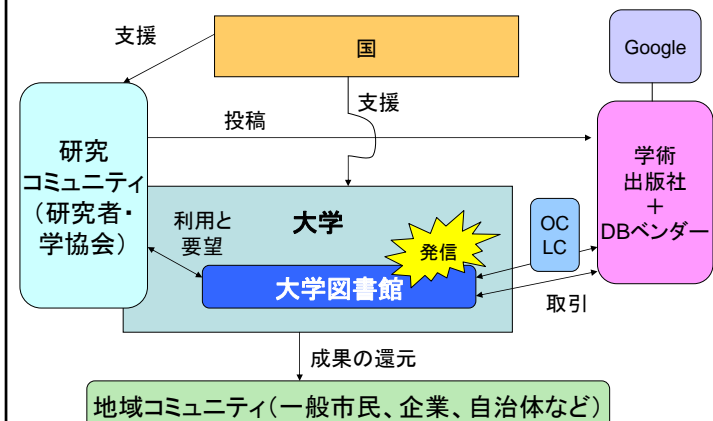
6

学術情報のグローバル化と政策的対応の必要性

- 研究活動のグローバル化、国際競争・協働
- インターネットというインフラ
- 多国籍企業としての学術出版社、データベース・ベンダー等の寡占化 vs オープンアクセス
- 研究振興と「国力」の意識
- 個々の大学と大学図書館、また大学図書館界がいかに生き残るか、いかに存在感を発揮していくか
 - 自らを取り巻く環境・ステークホルダーを知り、ターゲットを絞って適切な**発信・働きかけ**を行う必要

7

大学図書館を取り巻くステークホルダー(一部)



8

本日の発表への想い

- 学術情報・科学技術情報の流通をめぐって日本は孤立していないか？
- 「日本の立場」「図書館の立場」を外に向けて効果的に発信できているか？
↓
- 国際的な観点で「ステイクホルダー」の存在を確認する場のひとつとして、IFLA関連会議を取り上げる

9

IFLAとは何か

10

IFLAの概要

- 正式名称: International Federation of Library Associations and Institutions
- まとめると「図書館活動全体にかかわる国際団体」
 - 中心は各国の国立図書館と図書館協会
- 1927年創設、現在150カ国・1700機関以上が加盟 本部はオランダ・ハーグ
- 実際には「コア活動」「分科会」レベルでの活動に細分化
 - コア活動: 知的自由、著作権・法律問題、保存、など6つ
 - 分科会: 館種、サービス内容、地域ごとに45分科会
- ウェブサイト: <http://www.ifla.org/>

11

IFLA大会

- 毎年8月に世界各地で開催
- アジアではほぼ5年ごとに
 - マニラ(1980)、東京(1986)、ニューデリー(1992)、北京(1996)、バンコク(1999)、ソウル(2006)
- 今後の開催予定
 - ミラノ(2009)、ブリスベン(2010)、プエルトリコ・サンファン(2011)
- 大会前後に開催地近辺で、より特定のテーマにしぼった「サテライト会議」も開催

12

IFLAに関する主な情報源

- 小泉徹「図書館にとって国際化とは何か：IFLA（国際図書館連盟）設立・発展の80年と近年の変化」『現代の図書館』46(1), 2008.
 - 1990年代の米国主導（特に情報技術のアピール）から、再び欧州中心の多国籍主義へ
- 金容媛『図書館情報政策』丸善, 2003.
 - 特に第7章「IFLAによる国際協力」
- 毎年の大会参加報告
 - 『図書館雑誌』毎年12月号
 - 『国立国会図書館月報』毎年12月号 など
- 日本図書館協会 国際交流事業委員会
 - <http://www.jla.or.jp/kokusai/index.html>

13

講演者とIFLAとのつながり： 政府情報研究との関連

- 2005年よりIFLA大会に毎年参加
- 2005年大会（オスロ）：政府情報アクセスをめぐる図書館と文書館の役割、その融合に関する発表
- 2006年大会（ソウル）：「ウェブ・アクセシビリティ」に関する国際・国内標準と政府情報との関係、および図書館の役割に関する発表
- 2007年～：IFLA政府情報・公的刊行物分科会（GIOPS）委員

14

最近の発表の傾向

- さまざまな分科会を横断してのテーマが増えつつある
 - 分科会どうしが連携しての発表セッションも
- 博物館・図書館・文書館（MLA）連携もテーマに浮上
 - 「家系学・地方史分科会」を中心としつつ、「公立図書館分科会」「レファレンス・情報サービス分科会」でも扱う

15

IFLAにおける学術情報の位置づけ

- 「大学・学術図書館」「科学技術図書館分科会」「情報技術分科会」などで扱われる
- 企業・研究コミュニティ・図書館の3者が「ステークホルダー」として存在感を示す
 - 媒介者（書誌ユーティリティ）としてのOCLCの存在感の大きさ
 - 大会での展示：多国籍企業たる学術出版社、データベース・ベンダーの見本市のような様相あり
- さらに各国政府機関の役割、また国どうしでの連携、という重要性も示される

16

IFLA大会での展示の様様



2007年ダーバン大会



2008年ケベック大会
(展示会場でのパーティー)

17

今回の発表内容について

- 2008年大会(ケベック)、サテライト会議(モントリオール)での議論を中心に紹介
- ケベック大会(8月10日～14日):「科学技術図書館分科会」のセッション、OCLCのセッションを中心に

<http://www.ifla.org/IV/ifla74/index.htm>

- サテライト会議
 - 8月8日 モントリオール・ポリテクニクにて開催
 - 科学技術図書館分科会、政府情報・公的刊行物分科会の共催
 - テーマは「科学政策と科学ポータル」

http://lib.tkk.fi/ifla/IFLA_Science_Portals/

18

科学技術情報に関する発表・討議

19

IFLA大会およびサテライト会議での 科学技術情報のトピックス

- サテライト会議
 - カナダにおける科学技術政策の近年の動向
 - 米国、英国、フランス、韓国、中国での学術情報ポータルサイト運営の実情
 - WorldWideScience.orgについて
- IFLA大会(科学技術図書館分科会)
 - WorldWideScience.orgについて
 - 米国スミソニアン博物館でのBiodiversity Heritage Library
 - アフリカでの健康情報提供のための「デジタル・キオスク」
 - カナダ(カルガリー大)の大学授業でのDB活用

20

WorldWideScience.orgとは？(1)



21

WorldWideScience.orgとは？(2)

- 世界各国の科学技術情報(政府系機関によるもの)を集約したポータルサイト
 - IFLA2005・2006年大会における科学技術情報ポータルサイトに関する会合が基盤→2007年6月運営開始
 - 米国エネルギー省、英国図書館を中心に運営
 - 現在、50カ国以上が参加し、40以上のデータベースの統合検索が可能
 - 「深層ウェブ(deep web)」の検索も可能
 - 日本からはJSTが参加: J-STAGE、Journal@rchive、J-EAST(英語での文献検索)、J-STORE(特許情報、技術シーズ等の検索)が検索対象に含まれる

22

WorldWideScience.orgとは？(3)

- WorldWideScience Alliance
 - WorldWideScience.org運営のための多国間連合
 - 38カ国を代表する11の機関(JST含む)が参加し発足
 - 発足会議は2008年6月にソウルで開催
 - 国際科学技術情報会議(ICSTI)がスポンサー
- 参考文献: 「E810 - 世界の科学DBへのゲートウェイ“WorldWideScience.org”」『カレントアウェアネス-E』No.131, 2008.7.9.
<http://current.ndl.go.jp/e810>

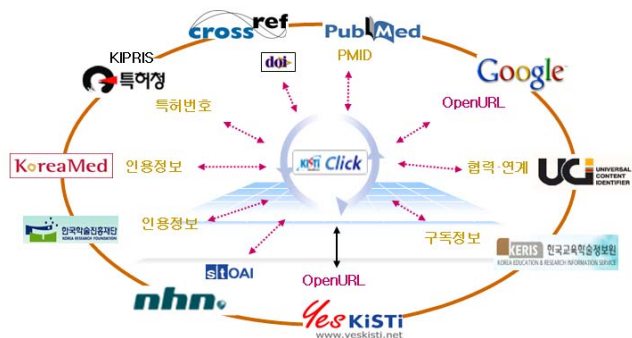
23

韓国における科学技術情報サービス(1)

- KISTIのHo Nam Choi氏による発表
 - 2008年7月のSPARC JAPANセミナーでも講演
- 科学技術情報サービスはNDSL(National Digital Science Links、旧名YesKISTI)のポータルにまとめる
- Cooperative Link Center of Korea (CLICK)構築計画 <http://click.ndsl.kr/>
 - 韓国内外の電子ジャーナル、データベースを横断するリンクシステム
 - マッシュアップのためのAPIも準備中

24

CLICKのイメージ (<http://click.ndsl.kr/> より)



25

韓国における科学技術情報サービス(2)

- WiseCat
 - 総合目録DBにWeb2.0要素を盛り込む
- Web2.0的サービス拡大にあたり、研究者IDの構築・維持が課題

26

カナダにおける科学技術情報DBの 大学授業での活用

- Don MacMillan氏(カルガリー大学図書館)の発表
- 学部レベルの授業で以下のようなDBを活用
 - カナダ、米国、欧州での特許DB+Google Patent Search <http://www.google.com/patents>
 - バイオ・インフォマティクスDB
 - Genbank <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/Genbank/index.html>
 - OMIM <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/sites/entrez?db=OMIM>
 - BLAST <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/blast/Blast.cgi>
- 「大学教育でのDB活用を通じたDB振興→情報産業振興」も示唆

27

OCLCの経営・活動方針

28

OCLCセッションの概略

- 8月13日(木) 16時～18時
- セッションテーマ「The new world of metadata」
- Jay Jordan 社長兼CEOの講演
- Karen Calhoun 副社長(WorldCat・メタデータサービス担当)の講演
 - 今回は後者を中心に

29

Jordan社長の講演の概要

- 企業買収が盛んな中での経営戦略を意識
 - 例: ProQuestがDialog(Thomson Reuters社のサービスとなっていた)を買収(2008年)
 - OCLCもRLGなど企業買収を進める(特に1999年以降)
- 各種サービスの拡大・新規提供
 - Googleとの協働:ただし契約内容の多くは秘匿

30

Karen Calhoun氏について

- 前職はコーネル大学図書館副館長→2007年5月より現職
- LCおよび研究図書館での書誌コントロールサービスの将来像を大胆に(LCSH廃止など)提言した「Calhoun報告」(2006年3月)で知られる
- ブログ“Metalogue”
<http://community.oclc.org/metalogue/>



31

講演タイトル: “OUR space: the new world of metadata”

- 以下でも公開 (Calhoun氏のその他の発表資料含め):
<http://www.slideshare.net/amarintha/our-space-the-new-world-of-metadata-presentation>



32

講演内容(1): 現状認識

- 「Metadata 2.0」の時代: 利用者主導のメタデータ構築、利用
 - Amazon、Google(+マッシュアップ)、eBay...
 - コレクションの変貌
 - 「Information Seeker」の変貌
 - 「図書館はコレクションを持っていて欲しい、しかし遠隔地からそれにアクセスしたい」
- 図書館におけるメタデータの伝統、またメタデータをめぐる実践はどう変わるか？

33

講演内容(2): 提言

- メタデータを広く公開せよ: 自らのコレクションを広く認識してもらうために
- メタデータの「サイロ」を開放せよ: メタデータの交換・再活用のために
- メタデータの質について、利用者の視点から定義を行うべし

34

OCLCの取り組み(1)

- 国レベルの総合目録データベースがWorldCatと連携(データ提供)
 - オランダ、英国、ドイツ、オーストラリアで着手、フランスは計画中
- メタデータの再利用・交換に向けた戦略: 次世代カタログング (Next Generation Cataloging)
 - 出版社との連携→出版社のもつメタデータ(ONIX)の拡張(MARCとのクロスウォークの設定など)、etc...
 - パイロット作業中: 具体的な「次世代カタログング」構築は2009年度中に

35

OCLCの取り組み(2)

- 国レベルの典拠ファイルを連携する試み (Fichier d'Authorité International Virtuel: VIAF)
 - 国を超えた典拠コントロールの構築を目指す
 - OCLC、LC、ドイツ・フランス国立図書館の合同プロジェクト
- メタデータの質の保証
 - WorldCat について利用者・図書館員からの評価を実施

36

その他、IFLA大会より

37

政府機関図書館分科会セッションにおける、カナダ国立図書館・公文書館副館長の講演より

- 国立図書館と国立公文書館の合併(2004年)を背景として...
 - 資料の受入・整理・記述・保存、レファレンスの融合
 - 利用者の視点で: 出版物・非出版物関係なく
- 「新たな専門性」の必要性
 - 図書館員、アーキビスト、IT専門家などがもつ従来の強みをいかに組み合わせるか
 - ボキャブラリ、コミュニケーションの変化も迫られる: ベンダーとの交渉の面など

38

政府情報(GIOPS)関連のセッション

- ウェブ上の法律情報の「公式性」
 - 紙の法律情報と同等の効力をもつかどうか
 - 米国議会図書館によるGlobal Legal Information Network(GLIN): 各国の法情報を集約、日本は未参加

<http://www.glin.gov/search.action>
- 政府情報と著作権との関係
 - 著作権フリーなのは米国のみ、あとは各国とも著作権が政府情報アクセスをコントロール

(『図書館雑誌』2008年12月号の拙稿も参照)

39

学術情報流通をめぐる課題

国際交流面での課題も含め

40

IFLA大会より(1): 世界の情報政策・ 情報市場の動向を把握する必要性

- 世界レベルのポータルサイト構築
 - WorldWideScience.org, GLIN
 - Google、OCLCの市場支配
- ↓
- いかに日本の立場を明確に打ち出すか
 - 情報リテラシー教育とデータベース振興策との結びつき

41

IFLA大会より(2): 「メタデータ2.0」の 時代への対処

- Google、Amazonレベルの「世界的巨人」となりつつあるOCLC
 - 日本の諸機関(NII、JST、NDL、各大学図書館など)としても明確なポリシーのもとで対処する必要
- NIIでの「次世代目録システム」をめぐる議論への影響は？
 - 参照: 特集「目録の現状と未来」『情報の科学と技術』2008年9月号

42

日本の大学図書館の国際化対応の 現状

- 外国語でのサインや利用マニュアルの充実に着手
- 図書館員の海外派遣: 外国の情報を収集し、日本で活用するための内向きなもの
- **日本における図書館の状況や種々の試みや動向をきちんと諸外国に情報発信して、外国からアクセスしやすい状況を作るものとは言い難い**

伊藤義人「学術情報と大学図書館」『丸善ライブラリーニュース』復刊第2号, 2008.5.

http://www.maruzen.co.jp/business/edu/lib_news/bac_knumber20080512.html

43

日本から発信できる情報の例として...

- 日本における機関リポジトリの構築状況と、それに関連する取り組み
 - 「学協会著作権ポリシーデータベース(SCPJ)」など
- 日本における学術情報流通の独自性？
 - 日本の学協会や研究コミュニティにおいては欧米のような「学術情報の商業化」への意識が比較的薄く、かえって「オープンアクセス」への移行が容易と言えるかもしれない(林和弘「日本のオープンアクセス出版の諸状況」第10回図書館総合展発表(SPARC Japanセミナー2008), 2008年11月27日)

http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2008/pdf/112708/3_lib_fair_0a081127.pdf

44

北米における日本研究との関連

- 日本の文化(美術、マンガ、ゲームなど)への研究・教育面での着目
- 関連する資料(画像)の利用・引用にかかわる著作権の問題
→在米図書館員の問題提起と調査、日本の関係者(ステークホルダー)へのアピールへ
- バゼル山本登紀子ほか「海外日本研究者の画像利用」『出版ニュース』2008年7月下旬号.
- 林理恵・小出いずみ「研究者の画像利用と司書の役割」『図書館雑誌』102(9), 2008.

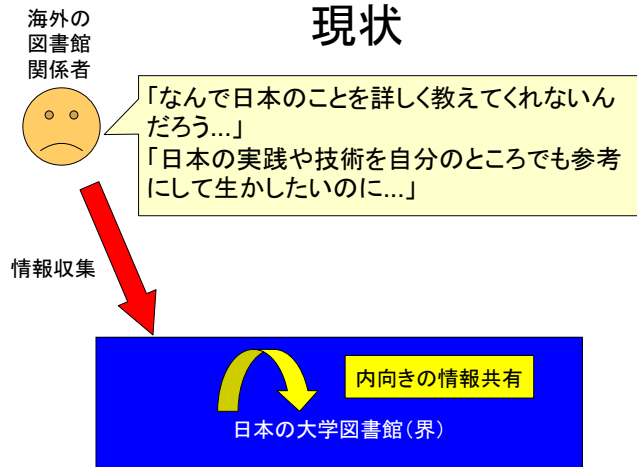
45

まとめると...

- 「ソフトパワー」を支える存在としての図書館
(参照: 前述(スライド13番)の小泉氏の文献; 小浜正幸・京藤松子『ブッシュとソフトパワー』自由国民社, 2006.)
 - 情報共有の基盤を構築し、自由な討議と相互交流を促す
 - 対外的な情報発信を支える+図書館自ら発信する
- 「技術と経済力のある日本がなぜ図書館やアーカイブズの領域では目立たないか」と国際会議の場でしばしば言われる
- 日本としてどこに対外的足がかりをつくれればいいか...発信・発表なくして始まらない!

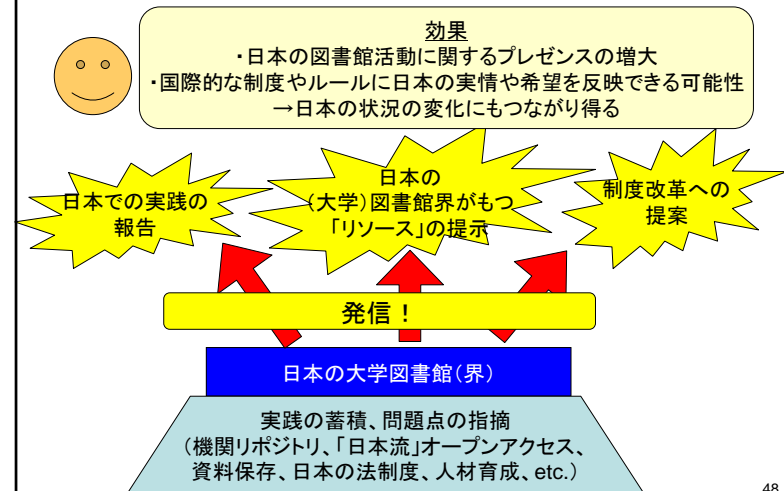
46

現状



47

現状からの脱皮



48